

ラジオドラマ

『防災缶詰はハッピーエンド』

【登場人物】

大石 沙智（28） 町役場の防災課勤務

アムリット・L・A・フェルナンド（28）

スリランカ人の技能実習生

大石 信江（60） 沙智の母親

ヒヤムギット・L・A・フェルナンド（40）

故人 アムリットの父

【梗概】

徳島の缶詰工場。町役場から派遣されている沙智は、新製品開発チームで防炎用の新しい缶詰開発に取り組んでいる。

ある日、スリランカから来た技能実習生アムリットと偶然出会い、彼の父と沙智の母信江の不思議な縁を知る。

「防災缶詰は、災害の時、人々を勇気づけ助けるハッピーエンドのためにある」

彼の言葉に心打たれ沙智は、新製品のアイデアを共に考え、一歩踏み出す。

M 明るいのかな曲。

S E 海辺の波の音とイソヒヨドリの囀り
自転車のベルとペダルをこぐ音。

沙智⑩「私は大石沙智。徳島県S町の町役場
防災課に勤務している。一か月前から町
の缶詰工場に出向し、プロジェクトチー
ムに入って防災用の新製品を開発中だ。
それはいいけど、工場は丘の上。上り坂が、
あーしんど」

S E バスのドアが閉まり、発車する音。
中に入った缶詰がニく三個落ちて転
げる音。自転車のブレーキ音。

沙智「あ、ああ、落っこっちゃった、缶詰。
(自転車を停めて、スタンド立てる)」

S E 転がった缶詰を止めて拾う音。

アマリット「(外国人訛りの日本語で)これ、落ちました。あなたの。サバ缶詰、カツオ缶詰」

沙智「そうそう、新商品なの。ありがとう。」

(受け取って自転車のかごに入れ) 工場の方？」

アマリット「ええ。私は、技能実習生」

沙智「ああ、何人か来ていたわね、今月」

SE 自転車のスタンドをはずし、押して歩く音。二人の足音。

沙智「どこの国から来てるんですか？」

アマリット「スリランカです。わたし、名前は

アマリット・L・A・フェルナンド

と申します」

沙智「あ、大石沙智です。どうぞよろしく」

アマリット「大石？ 日本人、大石の名前、

たくさんいますか？」

沙智「え？ いや、べつに多くないけど」

アマリット「大石ノブエさん」

沙智「私の母の名前だけど」

アマリット「大石ノブエさん。私のお父さんの日本の友達。お父さんはずっと前、亡くなったけれど、日本でさがそうと」

沙智「まあ……お父さんのお名前は？」

アマリット「ヒヤムギット・L・A・フェルナンド」

沙智「ヒヤムギ・フェルナンド、それって……」

ちよつとごめん（携帯電話をかける音）

あ、お母さん？ あのなら、スリランカのヒ

ヤムギさんという人な、おったやろ……」

M 心が和む温かい曲

SE 引き戸を開閉し、茶の間の玉のれんをくぐる音。窓辺の風鈴の音。

信江「まあ、よう来たなあ、スリランカから。

さ、ここに腰かけて。（椅子を引く）フェルナンドさんの息子さんやて。立派にな

つてなあ……。晩御飯、今日はうちで食
べてってな」

アムリット「突然で、ホント、すみません」

沙智「はい、紅茶もどうぞ（テーブルに置く）」

S E 紙包みを開く音。テーブルの上に缶
を置く音。

信江「これを見てほしかったの」

アムリット「きれいな花ですね、赤や黄色の」

沙智「うちのお母さん、空き缶とかマグカッ

プをリメイクして造花をようけ入れて、

飾るんが趣味なんや」

信江「花じゃないの、この空き缶を見て」

アムリット「スリランカの文字。海老の缶詰」

信江「あなたのお父さんが送ってくれた海
老なんよ」

沙智「ええ？」

信江「あれは、まだ沙智が4歳の時やった」

M 回想場面の音楽

SE バスの中、アナウンスとエンジンの音。ドアの開閉の音。人の話し声。

沙智（4歳）「ママ、沙智、のどかわいた」

信江「棒につかまって。もうすぐやからな」

沙智「お腹空いた。冷や麦たべたい」

信江「おうち着いたらたべような、冷や麦はすぐゆだるけん。今は辛抱して。」

ヒヤムギット「（外国人訛りで）この席、どうぞ」

信江「あら、ご親切にありがとうございます」

沙智「ママ、どうしてこのおじさん、黒いの？」

信江「こら、そんなこと言わないの」

ヒヤムギット「かわいいですね。私、遠い国、スリランカから来た。だから黒いよ」

信江「まあ、そうですね。工場にお勤めで」

M 和やかな音楽。

S E ホットプレートで焼き肉をする音。

家族で食事をする音。

沙智「4歳の私がお腹空いた、冷や麦、冷や

麦言うたら『それは私の名前。ヒヤムギッ

ト・フェルナンド』って言うて。おじさん

の名前、すぐおぼえたのよね」

信江「故郷にいる自分の息子も沙智と同じ

年だって言っつて。仲良くなったの。一年後、

ヒヤムギットさんが帰国した後も手紙の

やり取りが続いたわ」

アムリット「私も、大石さんから日本のおも

ちゃ、車や電車、送ってくれたのを覚えて

います。あのできごとで、何もかもダメに

なったけれど」

M 恐ろしい災害を想起する音

S E 大津波と、川を逆流する水の流れ、

濁流が何もかもを飲み込む音

TVのアナウンサー「十二月二十六日午前
0時五十八分にインドネシアのスマト
ラ島沖で発生した地震についてお知ら
せします。地震規模はマグニチュード
9・0、大規模な津波が発生し、マレー
シア、タイを始め、インド、スリランカ
東部およびモルジブ諸島に甚大な被害
をもたらした模様です。詳しくは：

沙智「津波が起きる前日、クリスマスの日
に、このエビの缶詰を開けてごちそうに
していたの」

アムリット「私はその時、小学校の一年生だ
った。海老の船を心配して見に行ったお
父さんは、津波にのまれた」

信江「スリランカに電話しても、2カ月たっ
ても3カ月たってもつながらなかった」
アムリット「家も流されたから大石さんの
住所もみんなわからなくなった。母や兄
弟や私は親戚の家にて無事だった」

信江「本当に、ここまで大きく立派になって、お父さんも空できっと喜んでくれているね（涙ぐむ）」

M 心温まる音楽。

アムリット「私は来年の春まで技能実習する。今、弟がお父さんの海老漁をひきついであっている。私、スリランカに帰ったら、工場作りたい。津波や台風、災害につよい加工品作る工場。それが夢です」

信江「すばらしいわ。本当に……（また涙ぐむ）あーだめだ、お母さんは今日はどう（一同笑う）」

沙智「そうだ、私ね、役場の防災課として、缶詰を色々な種類、開発しているの」
アムリット「防災のための缶詰？」

沙智「うん、防災缶詰。カツオやサバや、食料として美味しいもの。でも、それだけじゃないよ。くだもの、デザートやスウィ

ーツも」

信江「何で、デザートまで？」

沙智「災害の時ほど、最低限の食事だけでなく、贅沢なデザートとか甘いものも欲しくなるっていうアンケート結果があるの。

東日本大震災の経験者の話」

アムリット「いいね。デザート、スイーツ。

私、防災の食べ物は、暗い気持ちで作っちゃいけない、思う」

沙智「どうして？」

アムリット「地震や津波は、きつとまた来る。

でも、どんな災害が来ても、必ず人は助け合える。私も、そうだった。二十年前、私、津波でお父さん亡くなって悲しかった。

でも食べ物あって、温かい心あって、みんなで、涙ふいて、笑顔増やそうと頑張って、乗り越えた。防災缶詰はハッピーエンドのために作っておくものと思う」

沙智「話を聞いて、いつか涙を流していた」

アムリット。…ああ、アムリット。(鼻

をすする）本当だ。防災缶詰は、ハッピー
エンドのために作らなきゃね。未来のハ
ッピーエンドのために」

沙智 M 「缶詰工場で防災缶詰の開発。私は
今、ささやかだけど、『夢』と言えるも
のが見つかった。私は故郷 S 町をこれ
からも愛し続けて、みんなのハッピー
エンドのために、防災を、災害への備
えを、頑張っていこうと思う。

S E 黒潮の波が打ち寄せる砂浜の音。

M 明るいエンディング曲。